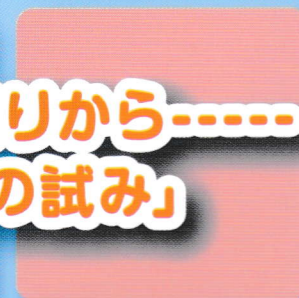
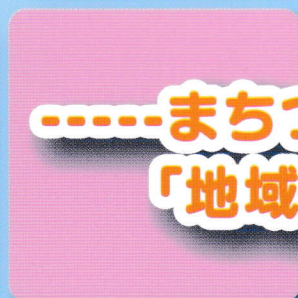
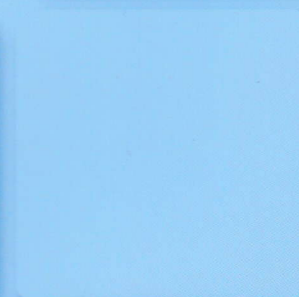
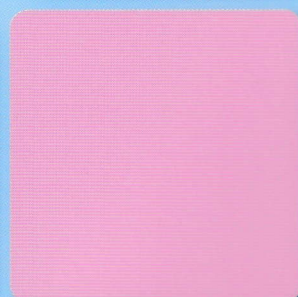
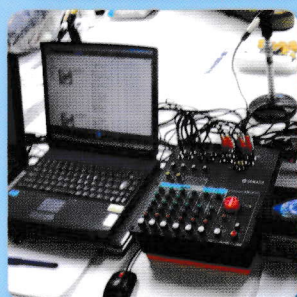


桜丘まちづくり活動の歩み



-----まちづくりは人づくりから-----
「地域の絆づくりへの試み」



はじめに

世田谷区桜丘のまちづくりは、住民組織として活動を開始してから30年が経ちます。この間、街は大きく様変わりしました。街は何もしなくても時と共に変わっていきませんが、何もしなければ、往々にして悪い方向に変わっていくのが常です。

桜丘のまちづくりは、「住宅地としての恵まれた自然環境を生かした魅力のあるまちづくりを進めよう」という目的で、地域ぐるみで取り組んできました。まちづくり活動は、地域住民の絆づくりから始まります。何かが完成するとその成果物だけに目が奪われがちですが、施設が形になるまでには、関係住民の合意形成が不可欠です。したがって、まちづくりは地域住民の絆づくりの成果ということになります。地域の課題と一緒に取り組むことで、住民同士の交流が深まり、結果として顔の見える魅力のある街になります。

桜丘のまちづくりを考える会が発足した当時は、良好な住宅地に見える中にも多くの課題を抱えていました。商店街には放置自転車やたばこの吸い殻、ごみ問題など関係住民だけでは解決できない問題もありました。また、都営住宅の建て替えや小田急線の高架複々線化など街の環境を大きく左右するような事業にも関わることになりました。更に地域に内在する課題や子供たちの健全育成など、ハード・ソフト両面からのまちづくり活動を続けてきました。

そこで、平成に始まった桜丘のまちづくりの活動経過を、平成の締めくくりの年にまとめることとしました。街の様子が変わるには、必ず変わるための要因があります。桜丘まちづくり活動は、街の様子が変わる要因づくりに関わってきましたので、それら背景も交えて紹介することとしました。街はそこに住む住民と町会や商店街といった組織、学校や地域及びその周辺の様々な団体との協力関係で成り立っており、それが街の魅力となっています。近年、新たに桜丘に居を構える居住者も増えております。新住民として桜丘地区に縁ができた人たちと昔から住み続けている人たちが、街に対する認識を共有することで、地域の絆づくりに役立てばと思っております。

桜丘まちづくりの運営には、世田谷区の職員の方も多く関わっており、住民と一緒に課題解決に取り組みました。区の職員というより、協議会の仲間という意識で会員と一体となって活動をしていただいたことで、行政に対しての不満を口にすることはありませんでした。むしろ、「行政の課題をみんなで解決してあげよう」という住民意識が芽生えたほどです。桜丘のまちづくりに区の職員の方がどのように関わってきたかも紹介しています。30年前とは区の方針や社会情勢も変わっていますので、そのまま参考になるとは思いませんが、他地区でのまちづくりに関わっておられる行政の方にも参考になればと思います。

また、本小冊子は、前年度に出版した「桜丘の今昔」の続編という位置づけで読んでいただければと願っています。

目 次

I. まちづくり活動発足のきっかけ -----	03	22. 千歳船橋駅前広場計画案づくり (1998年) -----	42
II. まちづくりの背景 -----	04	23. 千歳船橋駅周辺街づくり計画案づくり (1998年) -----	44
VOICE 若松由佐子 -----	05	24. 放置自転車の整理活動 (1998年～1999年) -----	45
III. 街並み整備促進事業とまちづくり協議会の発足 -----	07	25. 民間駐輪場の開設 (1999年～) -----	45
VOICE 太田十郎 -----	08	26. ウォーキングラリーの開催 (2000年～) -----	46
IV. まちづくり協議会の共通理念 -----	09	VOICE 梶野誠司 -----	47
VOICE 嶽道優子 植松葉子 -----	11	27. 桜丘すみれ場自然庭園の計画への参加 (2001年) ----	48
V. まちづくり協議会の運営 -----	13	28. 桜丘地区まちづくり計画案づくり (2003年) -----	48
VI. 定例会などの運営内容 -----	14	29. わんわんパトロール (2004年～) -----	50
VII. まちづくり協議会からNPO法人へ -----	15	VOICE 久保田静廣 -----	51
VIII. 桜丘及び千歳船橋駅周辺のまちづくり活動の成果 ---	16	30. 不法看板撤去運動 (2004年～) -----	52
1. まちづくりニュースの発行 (1989年～) -----	16	31. 桜丘の道路に名前をつける (2005年) -----	52
2. まちづくり掲示板と空き缶のリサイクル事業 (1990年) ---	18	32. コミュニティサロンの運営 (2006年～) -----	53
3. 桜丘まちづくり計画の策定 (1991年) -----	19	VOICE 飯沼楊子 -----	54
4. まちづくり祭りから桜まつりへ (1991年～) -----	19	33. 商店街活性化事業 (2006年～) -----	54
VOICE 荒井芳夫 -----	21	34. リサイクル活動1 古布・古着の回収 (2006年～) -----	55
5. 都営住宅の建替え計画案づくり (1991年) -----	22	35. リサイクル活動2 リサイクルコーナーの運営 (2006年～) -----	56
6. 東京都住宅供給公社横の桜広場計画 (1992年) -----	24	36. リサイクル活動3 ペットボトルキャップの回収 (2007年～) -----	57
7. 桜丘2丁目18番街区まちづくり協定締結 (1992年) ----	25	37. 商店街の納涼盆踊り大会協力 (2007年～) -----	58
8. 国際センター駐輪場設置への協力依頼 (1992年) ----	27	38. 商店街の街路灯での放送開始 (2007年～) -----	59
9. 地域まちづくり団体との連携事業 (1992年) -----	28	39. 助け合い隊の活動 (2007年～) -----	59
10. 桜樹広場計画案づくり (1993年) -----	28	40. お菓子の森(駄菓子屋)開設 (2007年～) -----	60
11. まちづくりセミナー (1993年～1998年) -----	30	VOICE 飯沼楊子 -----	61
12. 桜樹広場の管理協定 (1994年～) -----	31	41. ペナントギャラリー (2007年～) -----	62
13. 桜丘区民センターまつりの参加 (1994年～) -----	31	42. ハロウィン開催 (2009年～) -----	63
14. 消防団第16分団消防格納庫計画案づくり (1994年) -	32	VOICE 田中章恵 -----	63
15. 第1回防災イベント開催 (1995年) -----	33	43. NPO法人活動への助成事業 (2009年～2011年) ----	64
16. 桜丘小学校の児童との意見交換会開催 (1996年) ----	33	44. ホームページの作成と運営 (2010年～) -----	64
17. 桜丘まちづくり祭りから「ちとふな祭り」へ (1995年～) ---	33	45. 桜丘歴史写真館の開設 (2012年) -----	65
18. まちづくりバザーの開催 (1996年) -----	34	46. FM桜丘の開設 (2014年～) -----	66
19. まちづくり協定エリアの拡大 (1996年・1998年) ----	35	47. 「ふるさとの今昔」発行 (2017年) -----	67
20. 桜丘まちづくり音楽会の開催 (1997年～) -----	35	VOICE 伊藤和彦 -----	68
VOICE フィリップ・モル -----	38	編集後記 -----	68
リュウディガー・リーパーマン クリストフ・イーゲルプリンク		桜ヶ丘まちづくり活動の歩み年表 -----	69
ダヴィデ・フォルミザーノ 丸山和範		協力団体・協力していただいた人たち -----	73
21. 千歳船橋駅舎計画案づくり (1997年) -----	41		
VOICE 星野伸 -----	42		

桜丘まちづくり活動の 発足のきっかけ

今から40年ほど前(1980年頃)、世田谷区の街づくりは、全国的にも例を見ない提案や制度の策定、まちづくりの人材育成に様々な取り組みを行っていました。その企画部門としての役割を果たしたのが、都市デザイン室であり、実際に活動の補佐したのが(財)街づくりセンターです。コミュニティー道路としての用賀の麓道や桜丘プロムナード(蛇行した道路や泣き笑い石)世田谷区の名所を紹介したユニークなサインポールのデザインなど、目に見える形のものもあれば、まちづくり活動のコンサルタント育成のための講座の開講やまちづくり手法を紹介したテキスト出版なども多く、全国各地からまちづくり関係者が参加していました。

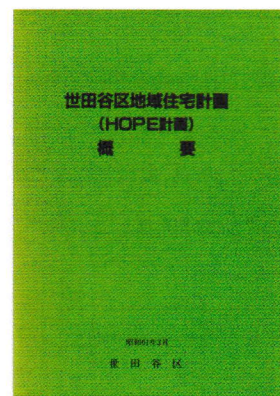
世田谷区は良好な住宅地というイメージは全国的に知られていることですが、その環境を維持していくため、多くの地域で建築協定なども締結されました。そんな中、国土交通省(当時は建設省)の事業として、地域特性を生かしたまちづくり計画(HOPE計画)の募集があり、全国各地で名乗りを上げました。この事業は、地域の特性を生かしたまちづくりによって、地域活性化を目指したものでした。世田谷のような都市部では、この事業はなじまないのではないかとといった意見もあったようですが、桜丘地区は世田谷区の真ん中であって、唯一住宅地の中に農地が残る地域であるため、農地と住宅が共存できるまちづくりの可能性を検証するには適切ではないかということでモデル地区として選定されたと聞きます。つまり、農地と住宅の共存型まちづくりの手法の検証が目的だったようです。

これまでの桜丘まちづくり協議会の活動では、「緑豊かな世田谷区を構成している緑は農地であり、災害時の避難場所にもなる」ことを提案し続けてきまし

たが、農地は緑地ではないという考え方から、緑地を増やしていこうという区の方針とは逆行する形で、年々農地が減少していきました。

そして、HOPE計画から32年を経た平成30年(2018年)になって、やっと都市計画法が改正され、用途地域指定の中に『田園住宅地域』が制定することができるようになりました。同時に緑地法の改正で都市農地が緑地として位置づけられるようになりました。まちづくり協議会発足時から、何度も世田谷区に「農地を緑地として、相続税からの減免処置を講じてほしい」という要望を出しましたが、相続税は国税であり、税法は変えられないということで、生産緑地法の名のもとに、相続をきっかけとして多くの農地や屋敷林が消滅してしまったことは残念な限りです。生産緑地法は生産緑地を残していく法律のように誤解されている方も多いようですが、「生産しない緑地は宅地化していこう」という主旨の法律です。都市部での宅地の不足を解消するために設けられた法律でした。したがって、農水省ではなく国土交通省の管轄区分となっています。

今更になっての田園住宅地域の制度ができて、遅きに失したという感がありますが、まちづくり手法の在り方を正確に把握していただくためと、桜丘のまちづくり活動30年を区切りとして、桜丘まちづくりが、今までどのような活動をしてきたかについて、現在ある街の姿がどのようにしてできたかを次の世代に伝えるために、活動の目的や背景を交えながら活動記録としてまとめることとしました。次の世代も末永く桜丘が良好な環境の街として維持されることを期待します。



▲世田谷区発行の「HOPE計画」資料

II

桜丘まちづくりの背景

桜丘のまちづくりは、昭和61年(1986年)の国の事業であるHOPE計画(地域に根差した住まい、まちづくり)のモデル地区として桜丘地区が指定されたことから始まります。計画の目標としては「残された緑の資源を生かしつつ、徐々に進行する市街地化に対して、住宅・住環境整備の観点から、これらの計画を誘導する」また、「地区の将来の姿を想定し、地区住民の創意あるまちづくりと主体性に期待しつつ、これを区がバックアップする」というものでした。桜丘は、世田谷区のほぼ中央に位置し、しかも農地と住宅が混在するという地域特性を持っていました。(残念ながら、現在ではこれらの農地の多くが宅地として分割・分譲されてしまいました。)これらの農地を生かしたまちづくりを進めることを目的に始まったのは前述のとおりです。計画の骨組みとしては、以下の3つを計画の基本フレームとしました。

- ① 都営住宅の建て替え改善計画
 - ② ソフトなインフラ作りをめざすプロムナード計画
 - ③ 地区の特性と居住者ニーズ、住まい方を生かした住宅・街区整備のガイドライン
- が掲げられました。

これらの整備方針について地域住民への説明会が開催され、その出席者の中から有志を募り「桜丘まちづくり協議会の準備会」が発足しました。世田谷区内で多くのまちづくりコンサルタントとしての実績のある地域総合計画研究所(以下「地域研」とする)の若松由佐子氏より、地元専門家も加わった方がまちづくりを円滑に進めることができるという提案があったそうです。そこで、それまでに川崎市のまちづくりコンサルタントとして、住民参加型のまちづくり手法の実績があった小野建築設計室の小野富雄さんが地元のコンサルタントの一員として加わることにな

りました。

基本的な進め方等については、地域研が窓口になって、小野建築設計室が補佐するという形で進められました。桜丘まちづくりは、若松氏のこの地域に対する思い入れと理想とするまちづくりの夢がなければ、ここまでの成果は得られなかったと思います。特に今までほとんど関心がなかった地域住民が自主的にまちづくりを進めるまでに育ったことは大きな成果でした。若松氏は、まちづくり協議会が独り歩きできるようにするまで、昼夜を問わず献身的に協力してくれました。区予算等の関係で、2人のコンサル派遣が厳しくなったため、途中で桜丘のまちづくりから離れることになってしまったのは残念でした。現在、NPOとしてまちづくり活動が続けられているのも若松氏の協力があったことが大きいと思います。



▲若松由佐子氏



▲建替前の都営住宅



桜丘2丁目西地区の まちづくりに携わって

すまい・まち工房 若松 由佐子

私が桜丘2丁目西地区のまちづくりの仕事に携わったのは、今から34年前、1985年(昭和60年)である。まちづくりの専門家と言っても、まだまだ、駆出して経験も浅く、力不足の頃である。また、当地区のまちづくりの方針である「住民主体のまちづくり」という考え方や手法も、まちづくりに取り入れられるようになってまだ10年弱足らずで、方法論的にも十分確立したものはなく、正直なところ1つ1つ手探りの状況で進めて行った。まず最初に進めたことは、「住民主体のまちづくり」の考え方や進め方を、住民の方々にわかりやすく広報し理解を深めていただくこと、そして、まちづくりの議論の場を作っていたことである。まちづくりニュースでの広報、説明会の開催、各種団体へのお願いなどを進め、まちづくり活動やまちづくり組織への参加を呼び掛けた。専門家も行政もこの初期の進め方に苦労するのであるが、当地区桜丘2丁目西地区では、町会や商店街、PTAなど地域の各種団体のリーダーの方々がまちづくりへの理解を示して下さり、まちづくり組織に積極的に参加して下さいました。一般公募での参加者もあり、かなりスムーズに「まちづくり協議会」が結成されたと記憶している。住民の皆さんがまちづくりに関心を持って下さり、好意的であったことがその後の多様なまちづくり活動の展開へと発展して行ったと思う。

以降10年ちょっと、当地区のまちづくりをお手伝いすることとなったが、この間、私の心に残るいくつかの活動を振り返ってみたい。1つ目は、まちの改善活動への取組みである。街並みまちづくり計画の作成が終わった頃だったかと思うが、駅前の放置自転車が大きな問題として指摘された。放置自転車問題はどこの街でも出てくる問題だが、行政に改善を要求することはあっても住民自らが改善に具体的に取り組むということは少ない。住民の方々が毎朝交替で駅前に立ち、自転車を止める方々に声をかけるという地道な活動を始められたのである。簡単に見えて継続するというのはなかなかできるものではない。この活動により、少しずつ改善が進んだのである。住民の方々のまちづくりへの熱意に感謝したことを覚えている。2つ目は、より一層のまちづくりの普及と地域住民の交流を図るために始まった夏の「まちづくり祭り」である。木工コーナーを出して下さいましたAさん、手品のコーナーで器用に子どもたちに手品を教えて下さったBさん、パズルを出して下さいましたCさん、折り紙コーナーを出して下さいましたDさん、わら草履づくりを教えて下さったEさんなどなど、それぞれの特技を活かして、そして桜丘2丁目西地区ではないけれど、協議会メンバーと繋がる多くの方々が祭りを彩るいろんなコーナーを出して下さいましたのである。この祭りは、毎年100人以上が参加する恒例の行事となり、この地域の方々の長年のさまざまな活動や取組みが結集する場となったのである。また、地区中央の都営住宅の建替えと合わせて地域集会施設が建設された。このホールを利用して開催されるようになった「クリスマス音楽会」も地元の多彩な音楽家たちが揃い、年末の一大イベントとなった。「まちづくり祭り」や「クリスマス音楽会」の開催を通して、桜丘2丁目西地区だけでなく周辺町々を含め桜丘地域の住民の方々の繋がりの深さと底力を感じたのである。

3つ目は、都営住宅地内の「公園づくり」である。住民の皆さんがグループワークによって、意見やアイデアを出し合い、皆で考え、公園計画をつくってみようという試みである、今ではこういう手法はどこでも当たり前のように行われているが、当時はまだ、それほど普及しておらず、私自身にとっても初めての経験であった。グループワーク開催の直前になって、当時、三軒茶屋にあったまちづくりセンターの研修会に参加してにわか勉強し、さら

にまちセンの浅海さんのところに押しかけて、グループワークのための各種「グッズ」を見せていただいたり、手取り足取り教えを乞い、ドタバタと準備したことが今も記憶に鮮明である。1回3時間というハードなグループワークを2回開催。皆で現場を視察し樹木の位置や空間の大きさを感じ取り、計画のイメージを作り、模型も創った。こちらも初めてのことで、ほんとにうまく纏まるだろうかと心配しながらのスタートだったが、住民の皆さんの頑張りで、敷地内の樹木を活かし池と川を創り、イベントも開催できる公園という皆さんの思いが詰まった計画案が纏まった。グループワークを開催してから、おおむね1年後、公園が完成した。

最後の4つ目は、「まちづくり協定」策定の活動である。「まちづくり協定」は、「まちづくり方針」に沿って建物の建替え時のルールをつくることである。主要街路沿いの4街区に区分し、順に協定づくりを進めた。街の全体方針をつくる、公園計画を創るなどとは異なり、これは1世帯1世帯の建替え行為に現行以上の規制をかけるということであり、将来の個々の暮らしや利害に直接関わってくることである。当初は、かなり難しい話し合いになるのではと思っていたが、多くの方が長い期間に渡る話し合いに粘りづくよく参加して下さり、それぞれ1年前後の期間をかけ3つの街区で「まちづくり協定」が締結された。心地よい環境や街並みを守り、形成するという関心が高く、積極的に検討して下さった。

私はもうすぐ70歳。「桜丘2丁目西地区のまちづくり」の仕事から退いて20年以上経つ。しかし、住民の皆さん自身によって、今も桜丘地区のまちづくり活動が継続されているという。驚いてしまうし、ほんとに素晴らしいことである。私がまちづくりに携わったたくさんの地区の中で、今も継続しているというのは桜丘地区だけである。こうした長い期間に渡るまちづくり活動の展開、継続は、区の呼びかけで始まった当地区のまちづくりがスタートする以前からの桜丘地区の住民の方々のさまざまな地域活動の蓄積の土壌と地域住民の多様な繋がりがあったからであろう。そこに桜丘2丁目西地区のまちづくり活動のスタートと展開が加わって、桜丘地域全体のまちづくり活動へと拡がり、継続されてきたのだらうと思う。発足当時から、まちづくりの中心となって活動されてきた皆さん、そして新たに参加された活動されている皆さんに心から感謝したい。まちづくりのコンサルタントとして、こんなに嬉しいことはない。

そして、まちづくり活動の地元事務局として、私を支え下さり、今も皆さんの活動を支援して下さっている小野さんに心から感謝したい。また、当地区のまちづくりを担当し、暖かく積極的にまちづくりを支援して下さった多くの区の職員の皆さんにも感謝したい。

実は昨年の秋から、桜丘3丁目松が根地区の「まちづくり協定」更新の活動を20年ぶりにお手伝いしている。松が根地区に通いながら、なんだかタイムスリップしたような気分になることがある。現在活動されている住民の皆さんは、最初の「建築協定づくり」の皆さんの次の世代の方々である。30年という年月を経て時代状況も変化し「建築協定づくり」も難しい課題が多いがそれでも、親の代からの思いを次に繋ごうとしている方がおられるということは、凄いことである。まちづくりの専門家と言えば偉そうだが、私がお手伝いをできることは限られている。活動を進めるのは地域住民の方々の思いと実行力である。私はまちづくりの支援という仕事を通して、実は住民の皆さんから、学んでいるのである。大げさに言えば人生を教えてもらっているのである。

地球環境レベルの問題、災害の危険性の増大、家族やコミュニティーの状況の変化、世界規模の政治、経済動向の変化、水やエネルギー問題などなど私たちが抱える課題は大きく、世界が社会が大きく変化している。少々大げさな問題まで論じたが、これらは、他人事ではなく、みな自分事として、地域住民自身が考え、相互に協力し、関わっていかねばならない。こういう時代だからこそ、桜丘地域のような地域住民の力が重要なのだと感じている。

III

街並み整備促進事業と まちづくり協議会の発足

桜丘2丁目西地区の都営住宅の建て替え計画はあるものの、様々な理由で長年建て替えが進まず、荒れ放題になっていました。HOPE計画導入をきっかけに、都営住宅を建て替える案が具体的に進むことになりました。計画地は商店街に隣接する重要な位置にありました。この地域は、放置自転車やゴミの不法投棄、小田急線の複々線化など様々な問題を抱えていたため、「単に建物を建て替えるというだけでなく、街の問題を解決しながら、将来のまちづくりを検討していく必要があるのではないか」という意見が準備会からも出されました。そのような課題を解決するには、都営住宅の建て替えに関連した周辺まちづくり計画が必要ではないかということで、世田谷区の建築部住環境対策室(当時の名称)で検討され、この事業の推進には建設省(現在の国土交通省)住宅局住環境整備課の施策である「街並み整備促進事業」が適切であるという判断で、建設大臣の承認を受けて本事業が導入されることとなりました。そういった意味では、桜丘のまちづくりは都営住宅の建て替えから始まったといえます。

昭和63年(1988年)1月以降に、地区の現況調査や地域住民へのアンケート調査を行い、7月にこれらの結果がまとめられました。9月には調査結果と「街並み整備促進事業」や区の実行方針について地域住民との懇談会が開催されました。そして、事業を推進していくためには地域住民の参加が不可欠であり、組織作りから始める必要があるということで、組織作りのための準備会でメンバー構成などについて討議されました。まちの課題でもあり、幅広く意見を聞く必要があるということで特定の組織に偏ることがないように、町会や商店会、PTA、子供会、稲荷神社氏子総代、都営住宅居住者、地域のまちづくり活動

団体、そして一般公募した住民で構成された組織としました。平成2年(1990年)6月に「桜丘二丁目西地区まちづくり協議会」が発足しました。当時は、まちづくりというとはほとんどの地区で「街づくり」と漢字の「街」を使っていましたが、川崎市での住民参加型のまちづくりの経験から、「まちを変えるのは人であり、街づくりは人づくり」したがって、ハードに偏ることのないように、ひらがなの「まちづくり」が適切ではないかということで、ひらがなの「まちづくり協議会」として発足したわけです。当時、都立大学の小場瀬令二先生(全国で初めてパーソントリップ調査の手法を確立した)と小野さんが、小学生を対象に街に対する行動実態と意識調査を行った成果として、小学生でも街に対する意識が高いことがわかりました。そこで、大人の意識を変えることは難しいが、子どもたちの意識を育てることがまちづくりではないかという結論に至ったわけです。当時、一緒に川崎市のまちづくりの研究をしていた市の職員の川神寿雄課長(後にまちづくり局長)も日本で初めて、川崎市の都市計画部にひらがなの「まちづくり局」と命名したのも同じ考え方からです。

その後、桜丘2丁目西地区内だけでは解決できない課題が多くあったため、桜丘1丁目から桜丘5丁目、経堂4丁目の一部までエリアを拡大して「桜丘まちづくり協議会」として平成11年(1999年)1月スタートしました。桜丘町会の町会長の川端富造さんを会長として、南町会長であった荒井芳夫さんと参商会商店街理事長の太田十郎さん、吉岡道子さんの3名を副会長としてスタートしました。

さらに、平成17年(2005年)7月に、現在の組織である「NPO法人世田谷桜丘まちづくり」と組織換えされました。

【街並み整備促進事業】とは....

この事業は、「もっとゆとりとうるおいのある住宅地を作ろう！」を合言葉に、住民の皆様には住宅の建替などを、また市町村には地区施設の整備などをお願いし、地区住民と市区町村が協力しあって住環境水準の向上をめざすものです。

対象区域及び地区の要件

◇街並み整備促進区域

1. 区域の面積が1ha以上であること
2. 幅員6m以上の道路の延長が、
原則として区域なお道路総延長の1/4未満であること
3. 公園、広場、緑地の面積が、
原則として区域の面積の3%未満であること

◇街並み整備事業区域

1. 街並み整備促進区域内において、街づくり協定が結ばれた地区であること
2. 地区の面積が0.2ha以上であること

(建設省住宅局住環境整備室監修のパンフレットより)



▲街並み整備促進所業パンフレット

VOICE ~ヴォイス~

桜丘まちづくりとの関わり

太田十郎

桜丘のまちづくり活動は、都営住宅の建て替えに始まります。商店街のエリア内にあるということで、商店街活性化のカギになるものでした。したがって、発足当時から商店街の役員は積極的にまちづくり協議会の例会にも出席していました。当時は、駐輪問題やゴミ問題などもあり、私も当時から関係するテーマの時には定例会に参加していました。「商店街の問題を考える」というテーマの時は、アンケート調査への協力や検討会には役員だけではなく多くの商店主も参加して議論を交わしました。

その後、私が参商会の理事長を引き受けることになり、商店街との連携事業に重点的に取り組むことになりました。活動拠点の確保(NPO法人としての事務所)や商店街活性化のための助成事業を始め、「音楽会と売り出しのコラボ」「子どもたちと一緒に七夕飾り」や「ペナントギャラリー」「ハロウィンパーティ」など協働事業も多く行いました。子どもたちが商店街に来れば、自然と大人も足を運ぶようになるといった考えから、子どもまちづくり活動の応援も積極的に行っています。これからも、地域住民と商店街が一体となれるような企画があればと考えています。

IV

まちづくり協議会の 共通理念

また、当時は、行政が事業計画を進める場合、計画者である行政が関係住民に呼びかけて説明会を開催し、特に大きな問題がなければ、街づくりを進めるという「行政主導・住民参加型」が一般的な方法でした。このような場では、声の大きい人の意見が通りがちで、良い意見があっても少数意見は無視されることが多くありました。説明会を行ったという手続き上のことだけで進められた計画もあり、いざ事業実施となると関係住民が反対運動を起こすという例もありました。

このようなことから、「桜丘二丁目西地区まちづくり協議会」(以下「まちづくり協議会」とします)の発足に際して、要望型の組織ではなく「住民主導・行政参加型」の住民提案型のまちづくりを行うべきだということが、参加者全員の共通認識として確認されました。

一般的に何か問題があると「議員さんを介して行政に要望すれば、何とか対応してくれる」という考え方を改めなければならない」といった考え方でした。まちづくり協議会に参加している人たちが「自分たちのまちは、自分たちの手でよくしていこう」というように認識が変わったのは、コンサルタントの若松女史の大きな功績です。この精神は、平成17年(2005年)に「NPO法人世田谷桜丘まちづくり」と組織替えが行われても引き継がれ、30年間の桜丘のまちづくり活動の理念となっています。

この間、都営住宅の建て替えに伴う周辺まちづくり計画から、桜丘全体のまちの課題を検討することで、エリアも拡大、さらには小田急線の高架複々線化工事に伴う駅舎のデザインを含む駅前広場及び周辺計画と活動エリアも広がりました。千歳船橋の南側だけでは解決できない問題もあり、協議会が北側の商店街や町会に呼びかけて、船橋駅北側周辺まちづくり協議会の立ち上げることになりました。駅前

広場に関しては、両まちづくり協議会が世田谷信用金庫の松本支店長の協力で、3階の会議室を提供してもらい検討会を重ねて計画案を練り上げ、区や小田急電鉄に提案しました。現在の駅舎や駅前広場は、そのようにして出来上がりました。また、同時に提案されたのが、城山通りです。現在のように整備される前は、歩道が狭く歩行者がすれ違うのもままならないばかりか、歩道の切り下げ(自動車の乗り入れのために歩道と車道の段差をなくすために斜めにする)により車いすが転倒するほど傾くような状態でした。この計画も、2017年(平成29年)にやっと城山通りの両側に広い歩道が整備することができ、高齢者も乳母車も安全に通行できるようになりました。これらの個別の計画については、経緯も含めて後述する計画案の項で詳しく述べることにします。

活動は、ハード面の街づくりを主眼とはしていませんでした。むしろ、活動そのものは、物を作るというより「人をつくる」ことに徹していました。住民から様々な課題をまちづくり協議会に持ち込まれたわけですが、その場合も、将来子供たちに責任の持てるまちづくりはどうしたらよいかという視点で検討されました。「乳母車やシルバーカー、車いすでも安全に通行できる道にしたいね」「幼児でも安心して遊べる場所があればいいね」「高齢者が買い物の帰りにちょっと一休みできる場所があればいいね」「安全に楽しく買い物ができる商店街になればいいね」といった議論の中から、結果として、道路や公園、街角ベンチ、商店街の1階のセットバックスペースなどが出来上がったわけです。まちづくり活動というところのハードが主と誤解している方もいますが、最初から公園を作ることが目的となっていたわけではありません。そのようなソフトの考え方があったからこそ、日本で初めて住民主体のまちづくり協定が締結され、25年経った今でも協定エリアの住民自らが運営しており、この間何度も協定の更新が行われました。このことが良好な街なみを維持することに繋がっています。

30年間のまちづくり活動が順調に進んだわけではありません。桜丘全体を巻き込む大きな課題に直面したことがありました。当時、相続による土地の売却

で、マンション建設による住民とのトラブルや土地の細分化が進みつつありました。まちづくりのルールがなかったことから、多くの課題や要望がまちづくり協議会に寄せられ、「ルール作りが必要ではないか」という意見が出されました。そのことを受けて桜丘地域全体の街づくり計画案を提案することになりました。計画案作成に際しては、「なぜ必要か」などのソフト面での理由も記載されたのですが、なぜか道路づくりといったハード面のみが強調されることになり、住民同士の誤解を生んでしまったため、計画案を取り下げるといったこともありました。

ただ、今にして思えば、当時の計画案が住民の方に理解されていれば、現在のように宅地が細分化されることがなかったと悔やまれるところです。反省点としては、もう少し時間をかけて、納得していただけるような解決策を見つけるべきだったと思います。そうすれば、現在のように細分化され農地や屋敷林の緑がなくなるといったことも防げたかもしれません。世田谷区へ既に提出していた計画案を取り下げた理由も、まちの主役は住民であり、住民同士が対立するようになるのは、桜丘まちづくり協議会の「良好なコミュニティづくり」の理念に反するという判断でした。取り下げざるを得なかった原因は、この時の進め方が「行政主導・住民参加型」になってしまった点が反省点として挙げられました。

まちづくり協議会の発足したころは、前述のように「行政主導・住民参加型」が一般的でしたが、桜丘のまちづくり活動の特徴は「住民主導・行政参加型のまちづくり」「まちづくりは人づくりから」「自分たちの住むまちは、自分の家と同じ、人任せではなく、自分たちできれいにする」といったスローガンなど、当時としては画期的な運営の仕方だったために、全国紙でも紹介され、ほかの自治体や外国からも多く視察団が桜丘を訪れました。また、住民主導で成果を出しているということで、小学校の社会の教科書でも紹介されています。発足してから30年が経ち、良好な環境で街を維持していくために、協議会ははじめ、住民、行政がどのように取り組んできたかを検討過程も含めて紹介することで、今後同じようなまちづくりを進めよう

としている地域や人たちが、少しでも参考にさせていただければという願いを込めてまとめることとしました。

まちづくりの基本は「愛着の持てるまちづくり」です。この地で生まれた子どもたちは、ここが故郷です。したがって、「素晴らしい地域に生を受けた」と思えるように、できるだけ多くの良い思い出を持ってもらうことでした。このような考え方に賛同して、桜丘集会所で初めてコンサートをしていただいたのが、NHK交響楽団の打楽器奏者の植松透様でした。ベルリン留学から帰国した翌日のコンサートでしたが、快く引き受けてくれました(引き受けるまでは、何がなんだか分らなかったようですが)。コンサート後の懇親会で、地域の人たちの温かさに触れたことが桜丘地区に住むきっかけになりました。現在は、桜丘に家を建て、奥様は地域の子どもたちに音楽の楽しさを知ってもらいたいと様々な活動を続けています。

毎年行われているまちづくりコンサートに繋がるわけですが、そのきっかけを作ってくれたのが、オペラ歌手の獄道優子さんとピアニストのフィリップ・モルさんです。その他、ペナントギャラリーから七夕飾り、クリスマス飾りなど商店街と連携した地域イベントもたくさん企画しました。毎年4月に桜樹広場で行われている町会・参商会との合同「桜まつり」は、都営住宅の建替予定地で平成3年(1991年)8月24日に開催された「桜丘まつり」が発端となりました。このような様々な活動については、今までの活動の項で詳しく説明することとします。



▲教育出版「小学社会6(下)」まちづくりについての記述